

不確実さ不耐性と条件づけ場所嗜好性の関連 —強化率の操作と virtual reality を用いた検討—

ML16-7012G 土谷美月

専修大学人間科学部心理学科・大学院文学研究科心理学専攻「人を対象とした研究倫理委員会」の承認を得て実施した研究は、「コイン探索課題と心理的特徴の関連(承認番号:16-ML167012-1)」です。本研究にご参加いただいた方へのフィードバックとして、研究の目的と、結果から得られたことについて以下に簡潔に記載いたします。以下の内容に関して、疑問点やより詳細な内容についてご興味ございましたら、指導教員の国里愛彦までお問い合わせください。

問題・目的

不確実さ不耐性とは、不確実な状況や出来事に対して情動的、認知的、および行動的レベルでネガティブに反応する認知バイアスと言われています。不確実さ不耐性を行動レベルで検討する課題として、Radell et al. (2016)はコンピューターで取り組む条件づけ場所嗜好性試験を作成し、不確実さ不耐性が行動に与える効果を調べました。その結果、不確実さ不耐性の高低に関わらず、条件づけ場所嗜好性試験の結果に違いはみられませんでした。その理由として、課題における生態学的妥当性の低さと不確実さが機能していなかった可能性があるかと彼らは指摘しています。

本研究では、Radell et al. (2016)の作成した課題に強化率を変化させることで不確実さを付加し、バーチャルリアリティを用いて生態学的妥当性の高い条件づけ場所嗜好性試験を作成し、不確実さ不耐性と条件づけ場所嗜好性の関連について検討することを目的としました。仮説として、報酬が貰えるかどうか不確実な文脈における条件づけ場所嗜好性は不確実さ不耐性との間に関連がみられると予想しました。

方法

大学生・大学院生 74 名を対象に、不確実さ不耐性の程度を測定する尺度を含めた質問紙調査と本研究で作成した条件づけ場所嗜好性試験を実施しました。

結果と考察

結果として、強化率を変化させることで不確実さを付加した条件づけ場所嗜好性試験を作成することができました。一方、不確実さ不耐性と条件づけ場所嗜好性の関連の仮説は支持されませんでした。このことから、作成した条件づけ場所嗜好性試験の妥当性が高かったために、不確実さ不耐性と条件づけ場所嗜好性に関連がみられなかったと考えられます。今後の展望として、本研究で作成した条件づけ場所嗜好性試験において測定可能な行動を増やして検討する必要があります。